現代画家・『ジヴェルニーの平松礼二』展

２０１８年３月３０日から１１月４日までの期間、ジヴェルニー・印象派美術館にて、最も優れた日本画家のひとりである、平松礼二氏による絵画、屏風の約１０点の作品が展示されます。それらは、印象派画家クロード・モネとジャポニズムに強く惹かれた画家の最近の作品です。

(ジヴェルニー・印象派美術館、学芸担当、ヴァネッサ・ルコント)

２０１３年の水をテーマにした大がかりなノルマンディー印象派フェスティバルのプログラムの一環として、ジヴェルニー印象派美術館での第二弾の企画展に、初めてその作品がフランスで紹介される日本人現代画家、平松礼二画伯の『平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ』展が催されました。この機会に私たちのまだ若い美術館のコレクションはより豊かなものになり、再び、今回の『ジヴェルニーの平松礼二』展の実現が可能になり、７点の絵画と２点の屏風が展示されることになりました。

睡蓮・啓示：

平松礼二がオランジェリー美術館にてクロード・モネの大壁画に出会ったのは１９９４年にパリの画廊 JAL にて彼の個展が催された時で、その時の感想を次のように話しています。
「まさに、大きな衝撃でした。そして、大壁画を観ながら、これらの画布を縦に折り曲げれば日本の屏風のようではないかと思いました。いったい何に駆り立てられて、モネは、絵のモチーフとして、池を、睡蓮を、そのほかの庭の植物を、これほど大きな画布に描いたのかと、考え続けました。そして、その答えを見つけたいと、ジヴェルニーに行く決心をしたのです。そして、ジヴェルニーを訪れ、モネの庭の池の周りを何度も回っている時、突然、モネが、池の姿を、江戸時代に日本の女性が愛用した手鏡に似せて設計したのではないかという考えが閃きました。」
その後、平松礼二は、何度となく倦むこともなくジヴェルニーの地へ戻って来ます。このフランス人画家クロード・モネの作品をもっと理解したいと、ジヴェルニーで色々な季節の庭を歩き回り、そこでスケッチした沢山のデッサンをアトリエへと持ち帰りました。これらの、水の風景、その水の反射、きらめきは、画家の大切なモチーフとなり、また、クロード・モネが１９０７年と１９０８年に浸かった円形フォーマットも採用しています。

モネの足跡：

１９０９年に、美術評論家ロジェ・マルクスは、変化してゆくクロード・モネの作品を次のように分析しています。
「もはや、地面も、空も、境界もない。 眠ったような豊かな水のうねりが、キャンヴァスの面を覆い尽くしている。溢れる光が青緑色の浮葉でおおわれた水面に、戯れるようにふりこぼれている。その中に睡蓮が見事な姿を現わす。白やバラ色、クリーム色の花冠が、大気を、太陽を求めて空高く伸びている。
ここで画家は、西洋絵画の伝統から離れ、ピラミッド型の構図線や一消失点の追求をやめている。そのような固定されたものや不変さは、彼にとっては、自然の本質であるうつろいやすさとは矛盾すると思えた。彼は、注意をあらゆる方向に拡散させることを望んだのである。」

印象派と日本への旅：

平松礼二のモネへの敬愛の念は、彼を何度もルーアンや、オンフール、エトルタ、フェカン、ドーヴィル、トローヴィルといったノルマンディー海岸の地へと導いています。

平松礼二は２５年間にわたり、日本固有の美術とクロード・モネはじめジャポニズムを研究した画家たちの作品を研究してきました。その中でも特別に深く研究したのはクロード・モネの日本とフランスの美の交叉（こうさ）点です。モネが歩いた足跡をスケッチブックをかかえて描きつつたずね歩き、辿りついたジヴェルニーがモネの日本趣味の集大成でした。
この、ジャポニズムへの旅を、彼は、次のように表現しています。
「クロード・モネの睡蓮の超大作のシリーズを観て愕然とした。一念発起して『印象派・ジャポニズムへの旅』という日本画家の眼による"ジャポニズム研究"を始めた。究極の目的は、ジヴェルニーにあるモネの庭園で"ジャポニズム"を探求すること。
少年時代から日本の美への憧れをいだき続けたクロード・モネ、彼が"ジャポニズム"になぜそこまで惹かれたのかを理解したい、そしてクロード・モネの眼というものを探りたい。」
平松礼二のモネへのオマージュは、オクターヴ・ミラボーがモネを『色彩を見事に表現し切った希有な画家』と表現しています。
これは、画家・平松礼二にも当てはまるのではないでしょうか。

日本画：

「日本画」とは、文字通り、「日本」の「画」すなわち「絵」を意味します。
この千年の歴史を持つ絵画技術は、７世紀に中国、朝鮮を経て日本に伝わったものです。
日本固有の画材、たとえば麻紙、鳥の子（トリノコ）という丈夫な紙のカンヴァスに岩絵の具：水干（スイヒ）泥絵の具、墨、金、銀、銅という金属を打ち延ばして作った
箔（ハク）やそれらを粉末にした泥（デイ）などを膠（ニカワ）（接着剤）で練って水で溶いて描きます。支持体には絹、紙（日本の和紙）を使います。
絵の具には岩絵の具、合成顔料、新岩絵具、胡粉（ごふん）と呼ばれる顔料があり、これらを固着させるために膠（にかわ）を混ぜ合わせます。
膠は牛の骨や腸、魚の軟骨から作られた棒状、又はシート状のもので、数時間水に浸した後、７０度ぐらいまで熱してきた溶液を濾過します。
ミョウバンと膠を混ぜ合わせた粘着性の混合液は礬水（どうさ）と呼ばれ、支持体への絵具の滲みを防ぐために必要であり、また胡粉の繋ぎとしても使われます。